

## 紀要特集号「ユーロ1年とアジア経済」の 発刊に寄せて

本研究所の研究活動を示す刊行物の中心は、改めて言うまでもなく『紀要』である。これは年2ないし3回発行しているが、従来は、研究所員の自由な研究の成果を発表する場として通常号を編集・発行し、そのほかに特別の事業を企画し実施した際にその記録として特別号を刊行してきた。この方針は今後も踏襲されてしかるべきであるが、本年度の運営委員会において、編集方針を示してそれに則った原稿を募集するという方法があり、年に1回くらいはテーマを設定して『紀要』の特集号を編集してみようということになった。その第一回目の特集テーマとして「ユーロ1年とアジア経済」を選んだ。

世界の基軸通貨としてドルが長年にわたって機能してきたが、昨年1月からヨーロッパの統一通貨としてユーロが登場し、理念的にはユーロ圏内で経済の国境が無くなり、2年後にはヨーロッパの約3億人の日常生活に共通通貨として通用することになる。一方で、その少し前からアジア通貨の危機が始まっていて、アジア経済そのものが深刻な不調に陥った。そこで、今後ドルに次ぐ国際通貨としてユーロがアジア経済に何らかのインパクトを与えるのではないかと、というやや気楽な発想から今回の特集テーマを考えた。

しかし、依頼原稿や応募原稿を見ると、もっと基本的なより広い観点からそれぞれの所説が展開されている。私どもが今回の特集号編集を決めた後になって、類似の雑誌に同類の統一テーマを設定した特集号のあることが判った。ただ、本特集の方が、地域をアジアに限定している（これは当研究所が創立以来アジア地域を研究対象

の中心としてきた伝統による) こともあって、内容が濃密ではないかといささか自負している。個人的な事になるが、畏友の中平幸典・元大蔵省財務官にはこの特集の関連でとくに講演をお願いし、国際金融活動の最前線の体験に基づいて広い視野から戦後の国際金融史全般にわたる話を賜り、それに基づく原稿を頂戴して巻頭を飾ることができた。

このような次第で本特集号は出来上がった。今後も適当なテーマを探りながら、その特集号を編集して行きたいと考えている。読者諸賢には本特集の出来栄えについて忌憚のないご批判をお寄せ頂きたく思うと同時に、今後の特集テーマについてもお知恵を拝借したいと思う。

2000年1月31日

所長 三好正弘